人間発達学研究　第6号
121−122　2015年3月

■学位論文内容要旨

児童養護施設における「生い立ちの整理」の現状と意義に関する研究
――全国の児童養護施設を対象とした実態調査より――

寺崎　千華（2014年度修了）

1．研究の背景と目的

厚生労働省（2009）の「児童養護施設入所等調査結果の概要」によると，児童養護施設（以下，施設）で暮らす子どもたちの約半数は，被虐待の経験をもつことが明らかになっている。また多数ではないが，父や母の拘禁や死別，行方不明などを入所理由とする子どもたちもいる。

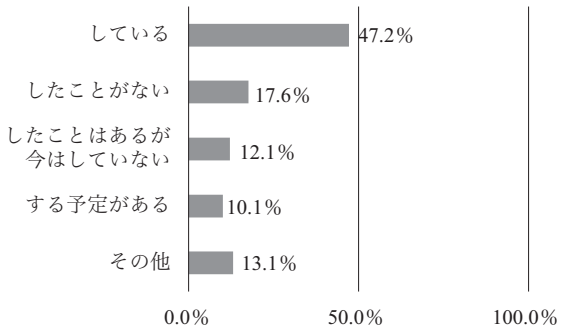
そこで，辛い経験や受け入れ難い親や家庭の事情などさまざまな入所背景をもつ子どもたちに，子ども自身の「生い立ち」について正しく伝えることや，より肯定的な意味を付け足していく関わりである「生い立ちの整理」[1)]が重要視され始めている。本研究では，全国の施設を対象に郵送アンケート調査を行い，「生い立ちの整理」の現状と「生い立ちの整理」実施後の子どものようす，子どもと職員の関係の変化，子どもと親（家族・親族）の関係の変化，職員の変化について具体的に明らかにする。そして調査結果より，「生い立ちの整理」の意義について考察を深めることを目的とする。

2．調査結果の概要

全国の児童養護施設（593施設）を対象に質問紙調査を実施した。回収率は39.1％（232施設）で，有効回答率は87.9％（204施設）であった。

1）「生い立ちの整理」の取り組み状況

「生い立ちの整理」は，多くの施設で実践されている取り組みであることが分かった（グラフ参照）。そして「生い立ちの整理」の実践方法として，実践している施設ではマニュアルを使用している施設は少なかった。しかし，参考にしているものとして「ライフストーリーワークブック」[2)]と「アルバムづくり」[3)]が多く挙げられた。



【グラフ】「生い立ちの整理」取り組み状況

2）「生い立ちの整理」の意義

①子どものアイデンティティの確立

「生い立ちの整理」が，子どもの将来を支える支援となっている現状が明らかになった。子どもたちの「アイデンティティの確立」を目的とする「生い立ちの整理」では，子どもの疑問に答えることや事実を伝える過程で，職員がその子を非常に大切に思っていることや，その子の人生においてたくさんの人が関わってきたことなどを，しっかりと言葉で表現して伝えなければならない。また，施設で育つ子どもたちには，施設生活経験者としてのアイデンティティもある。施設生活経験者として肯定的なアイデンティティは，施設で暮らしたことを肯定的に捉えられるようになることにつながると考えられる。

②子どもの権利保障

「生い立ちの整理」は，「出自を知る権利」の保障となる。子どもの権利保障は，非常に重要であるが，「生い立ちの整理」は，無理に行うべきでないとも言われている。子どもの状況や職員や親（家族・親族）との関係を考慮し，子どもが「生い立ち」に向き合えるかどうか，知りたいと思っているかなど，丁寧なアセスメントが必要であると考える。加えて，子どもの「生い立ち」を伝えることのみが権利保障となるのではなく，いつでも「生い立ちの整理」が行える体制を整えておくことも，子どもの権利保障となるだろう。

③子どもと職員の信頼関係の構築

職員が子どもとともに，子どもの過去に一緒に向き合うことは，子どもと職員の信頼関係をより強くすることが分かった。すなわち，子どもと職員の信頼関係を構築するために「生い立ちの整理」を行う意義があると考えられる。入所に至る経緯やその理由に関しては，「生い立ちの整理」の一環として，生活を共にする施設職員からも子どもの気持ちや理解を考慮した上で，繰り返し行うことは，子どもと職員の信頼関係が構築されてからではなく，アドミッションケアの段階でなされるべき関わりであると考える。

④子どもと親（家族・親族）の関係の再構築

子どもの「生い立ち」に触れることは，親（家族・親族）について必然的に触れることになる。施設で暮らす子どもたちの「生い立ち」や親（家族・親族）の背景にはネガティヴな内容が多い。しかし，たとえネガティヴな内容であったとしても，子どもたちの人生の一部であり，根幹であると言っても過言でないだろう。したがって，「生い立ちの整理」実施にあたって子どもと親（家族･親族）の関係の変化を見過ごしてしまってはいけない。

3．今後の課題

「生い立ちの整理」とは，どのような関わりをさすのかについて，共通認識が形成されていないことが分かった。入所理由の説明を「生い立ちの整理」として含むのか，「生い立ちの整理」は日常での何気ない関わりも含むのかなど，検討の余地がある。また，「生い立ちの整理」が子どもと職員の信頼関係を深める契機となり，親（家族・親族）との関係の再構築に期待されているが，現在あるプログラムやマニュアルでは，子どもと職員の信頼関係を深めることや，親（家族・親族）との関係の再構築は，あまり重要視されておらず，実施後のフォローについては言及されていない。したがって，子どもと職員の信頼関係を深めることと，親（家族・親族）との関係の再構築の視点を含めた「生い立ちの整理」の援助方法を考察と，「生い立ちの整理」実施後のフォローを含め，「生い立ちの整理」の開始から終了を見通した方法論の検討のため，「生い立ちの整理」の実践内容について明らかにする必要があると考える。

注

1）本論文における「生い立ちの整理」とは，「施設で暮らす子どもたちに，施設への入所理由や家族のこと，また多くの人たちの支えによってここまで育ってきたことを伝え，たとえ厳しい事実があったとしても，子どもが自らを受容できるように援助する実践とし，アルバムの作成やライフストーリーワークブック等を用いた援助や心理面接場面の援助だけでなく，日常生活のなかでさりげなく（しかし意図して）行われる援助も含む」とする。

2）才村眞理編著（2009）『ライフストーリーワークブック』福村出版

3）厚生労働省（2010）『社会的養護における「育ち」「育て」を考える研究会』http://www.mhlw.go.jp/sisetu/musashino/22/syakai/sodachi2307.html